

現代社会と造形教育の世界観の諸問題における新しい 「実在論」と「人間の実存」と日本の若者 —大学における実践的造形教育より—

Various issues with academic perspective of Modern Society and Art
Education New 「ontology」 and 「existentialism」 and Japanese youth from
a practical Art Education at University

三 原 信 彦

MIHARA Nobuhiko

1. 序論、教育現場より

本論は造形教育において中心となる人間像を様々な要素を含んだ総体と捉え、その世界観の認識からくる教育手法・方法論についての可能性について論じる。すべての教育的行為の根底にある、思想や意識の面から、または社会的構造からくる諸問題についても考察し、現代に実効性のある造形教育にまつわる事象を分析し、新たな教育の方法論を提案する。ここで取り扱う大学における造形教育とは、保育士・幼稚園教諭の養成校として、あるいは教育学学士の4年制大学が教養として学ぶ学生たちを対象にしており、主に18～22歳の若者が置かれている現代という環境と社会的な状況や、その中の人間という存在とを分析しながら、講義という時間と空間と場所をいかに構築すること、その教育的意義について論じる。

現代的問題を哲学的、社会科学的、心理学的な考察を主軸にしながら、芸術・美術の思想・哲学からの視点を織り交ぜながら論じてゆき、大学の講義で行っている実践的授業の実験的試みを紹介しながらその可能性を探っていく。講義では学生と講師側との双方向的な対話・交流を通じて感じているものや、学生たちが将来的に卒業してゆき、置かれるであろう学校教室外の社会の実態に合ったもの、そして未来を見据えた時の予測を、その教育内容に反映させようと心掛けている。

2. 現代的問題と教育的意義への哲学的視点からの考察

2.1 ここではまず教育の根本に据えるべき哲学的問題と現代の社会的問題と人間の内部で起こってくる問題について考察する。現代社会の、圧倒的情報の氾濫、科学技術、制度や規範あるいは道徳など、

生活環境の加速する変化速度に対して、我々人間の思考・意識がついていくことが難しくなっている。この事は、人間にとって、世界を把握することが難しくなったとも言い換えることができる。ここでは問題を2つの設定されたキーワード「人間の実存」と「實在論」の視点から見てみる。これらは、主に哲学の学問的用語を含んでいるのだが、その分野でも解決されない問題が多くあり、用語の定義、概念が定かではないことを最初に断わっておきながら、便宜上である意味と概念で使っているということを説明しておく。この二つは、実存（じつぞん）と實在（じつざい）だけでも良かったのだが、両者は字面がとても似ているので、混乱を避け判別しやすくするために、「人間の実存」と「實在論」に用語を改めた。実存と實在（本論での扱いは）存在の本質、存在そのものは文章的にも記述できないのではないかと、私たちのこの世界における人間存在から見た世界、人間の実存を「実存」という言葉を使う。複数の哲学の先人たちが問題とした概念、哲学の学問分野における用語の定義からすると少々雑ではあるのだが。

2.2. 用語解説とその概念

「人間の実存」の本論での定義は、この世界に人間が関与している人間存在を含んだもの、ここには自我の在り方を強く思い起こさせるもの、自己の存在、人間が主体、生きる意味など。

「生命（人生）の意味に関する問いは、たとえそれが述べられていなくても、あるいは不明瞭にしか言われなくても、本来的な人間的な問いという特性を持っているのである。したがって生命の意味を問題にするということは、それ自身では決して人間における病的なるものあるいはかたよったものの表現ではない。それはむしろ人間存在の本来の表現そのものであり、まさに人間におけるもっとも人間的なものの表現である。」¹

ここで「生きる意味」を入れたのは実存と関係があり、本論での「人間を形成する教育としての美術・造形教育」に関連があるからである。「實在論」とは世界の本質は人間の外に存在し続ける客観、在るとは何か論じるもの、反實在、非實在を含めてそのような議論と態度を本論ではさす。「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」など哲学的問題や論争について答えをだすものではない。通俗的な存在感、リアリティがあるという意味からは離れている。普通の人間にとって、ごく素朴な考え方である、見えている、感じることができる世界から始まり、この世には物質が存在するなどという、ものの見方も含まれる。世界をどのように捉えるかという行為、そういった働きそのものも含む。

2.3. 芸術分野における實在論と人間の実存についての現代的解釈

芸術は自己から表れるものを表現してきた。中世以前の美術史においても、神の存在を描こうとしたとしても、神の像の探求が人間の本質への探求へと置き換えて解釈される。人間を超えた力があるとするような神秘主義的なものも、現代的解釈により人間の内的な問題として扱われるということを鑑みると、現代的解釈つまりこれの根本には現代における支配的な思想とは、存在（本質）と実存とのせめぎあいを中心であるということを表している。有名な芸術家の人間存在や人格が物語化されて神格化される過程においても、この傾向があるのだが。

古典から近代の具象絵画だけを観た場合にでも、人物像から自然物、人間活動の産物、そのテーマ（主題）は森羅万象に及ぶ。描かれる対象が自然、自然物である風景や動物、草木花であるときも芸術

家の視点からは様々な次元で事物を見ているといつてよい。

芸術の歴史が示す価値観の多様性は、一部の宗教、極端な思想に観られるような究極的な疑問についての答えを提供しようとするものではなく、探究し続ける欲求を持った存在としての人間の在り方を見せる。それは生き生きとした生命の活動ともいえ、自我というものの存在を強くみることができる。

2.4. 新しい実在論から観た現代

実在について考えることが教育としての意義に関わる面は、自己を取り巻く環境への認識からアイデンティティ（自己同一性）の問題へと発展する点であるだろう。芸術家が行ってきた自己を探究するメソッド（手法）、およびこの世界を探究するメソッド（手法）は現代においても意味があるといえる。直感・洞察・感覚・感性等の人間に備わる能力は創造的な活動には重要なものであり、それらを利用して表現活動を行う。感覚・直感にまつわる事象は、クオリア（感覚質）という問題を超越して実体のあるものとして扱われ、実際の制作にも作品の成立に反映される。「感性」という言葉などが通常に用いられる美術・造形教育分野にも、この様な概念は導入されているので、社会的にその存在と有用性が認知されているといつてよい。最新の科学や「論理」にまつわる議論、脳科学や認知科学がこのクオリア（感覚質）などの問題の壁にあたっていることを考えると、明快な理論や証明もなくすでに成立している芸術・美術などは逆説的ながらも解らないからこそ存在意義があるといえる。いずれかなり科学的な解明が進むであろうが、人間の高次の意識活動であるようなものは奥が深いものかと思わせる。

「ここで論証したいのは、意味の場こそが存在論的な基本単位であること、およそ何かが現れてくる場が意味の場であるということです。」²

「これとは逆に、意味の場の存在論は、人間による様々な見方・見え方—パースペクティブ—を、存在論的な事実として理解します。世界が存在しないがゆえに、無限に意味の場のあいだを移行し続けています。」³

我々が知りうる、全ての事物と対象領域、そして事実が「およそ何かが現れてくる場が意味の場」⁴であり、現代人はそのような意味によってできている場と意味によって形成された世界に投げ込まれ、とてもそのすべてを同時には認識し、把握できないという困難な状況でもある。個人において、すべての知識・情報、世界のどこかで起こっていることを把握できないだろう。しかしこれには何かしら自分にも影響を及ぼす事実が含まれている。

現代の圧倒的な情報の過多さは、ただの情報とは言えず、あたかも実体のように質量をもつようになり、大きく世界の実像を変えてしまっている。その発明者である人間の制御を離れた技術的発展が、本来ならば追求しようとした利便性が、むしろ人間性を歪め、制度・規範の変化は伝統的な倫理観や道徳など今まで培ってきたものを壊し、人間に戸惑いを与える。現代人を取り巻く現実的環境の制度や規範、社会システム、確立された技術などが、非常に強い力で人間存在を本来のありのままの自然な姿からかけ離れた形で規定し制限している。「死」という事柄を取ってみた場合でも、自然界における自然死のような状況に置かれる可能性が薄くなっている文明社会の中の現実問題として「自殺」などが死因の上位に来るような特に先進国などでは、この「自殺」に象徴される「人間の実存の危機」はその社会的構造からもたらせられるといつても良い。ここでいう危機とは鬱、悲観、絶望、自己の存在理由の欠

如など、精神・心理の内面から人間の存在を脅かすものである。社会的存在意義などを自己の内面の問題として捉えた場合には、この中に入れることができる。異端者あるいはアウトサイダーといえるような芸術家によっては、社会から隔絶・孤立しながら制作を続けるケースなどもあるのだが、ある意味ではそのような状況でも確立することができる自己というものがあり、それを持つ者にとっては隔絶・孤立という状況にも危機意識が薄いことがあるだろう。

2.5. 学生たち世代の世界観や行動様式

学生たちと一緒に大学生生活に関わり、様々なジャンルについて対話していく中で、現代若者気質というべきものが見えてくる。それらに重視されているものを大きく二つ上げると「承認欲求」と「コミュニケーション力」である。これは、社会や他者からの承認欲求を強く求めることと、友人グループや恋人など狭い共同体の中の人間関係とそこに要求されるコミュニケーション力に縛られる。また孤独に慣れておらず、これを強く恐れる等が特徴かと考える。特に観察されるのが、社会的な集団の意思決定に影響が強く支配的流行を作り出す層、この主流から外れた者が持つ「空想・幻想」という行動もある。さらに大幅に外れてしまうと社会生活に破綻をきたし、虚無感や鬱的傾向が強くなるようだが、学校生活を支障のなく過ごすレベルに収まっていれば問題ない、あるいは本当に問題ないといってもよいのか。狭いコミュニティ（共同体）の中で生活が完結しているので、そこから離れる希望をあまり持たず近視眼的になりグローバルな視点を持ちにくい事とともに、自らの自己同一性に関わるような実存や実在への希求心・探究心が希薄になる。

「人間はただ一人で生存することはほとんど不可能である。それなのに共同生活を可能とするために文化から強要される犠牲を、大きな制約と覚悟するのは何とも奇妙なことである。そこで文化を個人から防衛することが必要となる。文化の機構・組織・規制などは、このために存在するのである。これらのものは、財を分配するためではなく、文化を維持するためにも必要なのである。文化と敵対する個人の営みを制御し、自然の支配と財の生産に有益なすべてのものを保護する必要があるのだ。」⁵

フロイトは文化と文明を分けていないので文明と読み替えても差し支わりはないが、文化・文明は動物的な生から抜け出させるものとしている。同時に欲・欲望・欲動などは、抑圧を生み出す要因という意味もある。

過密な社会における人間関係、過剰なSNSなどの人との繋がりなどが昔に比べて増加した。またネット世代において情報が多過ぎて信頼するものや拠り所とするものを持ちえない、あるいは危機感が希薄である。平成30年度版の厚生労働省自殺対策白書でも15～39歳の各年代の死因の第1位は「自殺」となっている。自然から離れた現代の若者において近代文明色が強い都市生活での価値観、環境下が主であり、そこから様々な今までにない問題が現れる。通信や様々な手段により、監視の及ばない世界が狭くなっており、逃避するような外の世界が無くなり、閉塞感は増加する。死に関しても自然死、肉体の死、戦争時で砲弾にあたる事ではない、いわば見えにくい死というような社会的制度・規範、狭いコミュニティ（共同体）の閉塞性から、いつのまにか必然的に、どうしてもなく行き場あるいは生き場所を失った状態に陥って至る死である。自殺・過労死・ストレスが要因の病死など、現代若者にとって最も身近に感じる死とはこの様なものだろう。

「人間の実存」の危機は「自殺」とも直結している。絶望、虚無感などもそこにあるだろう。閉塞的状况に陥り易い、認識できる世界が狭い、自分の今置かれている世界が何か分からない不安、「實在論」による世界の理解と広がりを感じすることはこの様な事柄への対抗手段となり、自己にとって安心感・充足感をもたせられる。

日本社会においてニート・引きこもり等の問題も出ている通り、社会現象としての現実逃避・社会的な疎外がある。学生から話を聞いていると将来の道、仕事、就職などについて社会的な承認欲求がかなり動機を占めており、金銭的生活費等の問題はもちろんだが、世間からと親や友人からの目を強く意識していることが分かる。通常生活の人間関係においても成果を、成績や貢献を強く意識する。正確な統計はないが、長年に渡り様々な学生と接してきてそのような印象を持っている。社会というものに縛られた責任性存在という人間の在り方と、現実には過度な承認欲求は満たされないことが多い。褒められる、必要とされる、愛されるなどが得られない場合どのようなことが起こるか。仕事や学校生活、友達関係、恋人関係が上手くいかないと、しばしば現実世界からの乖離と抑圧からの逃避行動、空想・幻想等を伴うものが起こる。

人間の行動を大きく決定する欲望という観点で見ると、まずは欲の種類には三大欲（睡眠欲・食欲・性欲）＋社会欲求と愛の欲求、承認（尊厳）の欲求、自己実現の欲求（アブラハム・マズローの欲求段階説より参照した。）などがある。「人間の実存」と関連する責任性存在と似た概念である承認欲求についてフランク・ゴープルの解説によれば、

「人間は2種類の承認欲求を持っている。すなわち、自尊心と他者からの承認である。自尊心は、自信・能力・熟練・有能・達成・自立、そして自由などに対する欲求を含んでいる。他者からの承認は、名声・表彰・受容・注目・地位・評判そして理解などの概念を含んでいる。十分な自己承認を持っている人間は、より自信があり、有能で、生産的である。ところが、この自己承認が不十分であると、人間は劣等感や無力感を抱くことになる。その結果、絶望したり、神経症的な行動を起こしたりすることもあるのである。」⁶

欲望を満たすシステムとしては日本の大衆娯楽があり、メディアの中の空想（ファンタジー）映画・ゲーム・漫画・小説等、VR（バーチャルリアリティ）コンピューターゲームでは受動的なものから参加する能動的なものへと変化が著しい。それらは生理的刺激を高めるような仕組みであり、非現実との境界が分かりにくくなっている。なお、授業休み時間中にスマホでゲームにハマっているのは男子学生が多い。この境界のわかりにくさとそこに没入させる中毒性の高さは世界を認識させる「實在論」を混乱させ、「人間の実存」も危うくする。

社会の共通の目標や価値がはっきりしなくなってきたことも危機をもたらす。戦後日本社会が求めてきた豊かさの功罪の影の部分でもある。社会保障なども以前より進み、生命の本能的な危機としての病死や、そう簡単には飢え死にすることもなくなった。高度経済成長期のころにあった「豊かさ」への願望と目標が薄くなり、若者にとって就業する際にも意味を持てなくなった。たいへん皮肉なことに「生の意味」などが見えなくなるようになってしまっている。

3. 美術・造形の実践授業と実験的試みからの考察

ここでは具体的に実践的な授業を取り上げ、そこでの考察を行う。一般的な子どもを対象にした造形教育からすると、やや実験的な要素も含んではいるが、従来から現代の芸術・美術からみれば決して外れたものではなく、それまでの歴史と成果を踏まえたものであり、実は極めて標準型といってもよいものである。

3.1. 実践授業①「空想ファンタジー絵画を描く」

この課題については、過去の自著論文で取り上げているが、今回は本論のテーマに沿った視点で論じる。空想ファンタジー絵画の実践授業では重要なのは無意識・潜在意識の働きである。無意識、潜在した願望や欲望とやり取りをすることによって精神のバランスを調整する働きや自己調整や浄化作用があり、例えば寝ているときの夢などにはその働きを持つものがある。夢の内容は非現実的な内容である場合が多く、これは空想的ともいえる。この課題のような空想ファンタジー絵画は、無意識のはたらきを反映させ、これを描く事によって自己に確認させられやすいものとしている。

この課題の現代性と意味については、現代人にとって理性的・道徳的であることを求められることが多くなった社会は、顕在意識の活動が優位であるのに対して、その反作用として抑圧される無意識のはたらきを探るという目的がある。大衆娯楽の中にはそのような抑圧された無意識の多くの顕現を見ることができる。様々な娯楽メディアのジャンル、映画、アニメ、漫画、ゲーム他、巷にWEB上に溢れるコンテンツでは、単なる自己にとって捉えやすい三大欲求のようなものを表したもののみならず、より深い潜在する願望・欲望を表しているものが多い。そのなかには空想・幻想・ファンタジー的な色彩を帯びているものを見ることが出来るが、これは非現実・非存在であるかのように装い、象徴、暗喩の力を借り、姿を変えて視えない潜在的なものを具現化している。学生の中には、そのようなサブカルチャーとも呼ばれる文化に強く接している者も少なくはない。ただし、学校などの様々なジャンルの嗜好を持つ者がいる公の場では、隠される傾向があり、孤立し易いあるいは類似した嗜好の者とグループを形成する。教室という場もそのような公の場に近い性質を持つので、教師である私自身もメインカルチャー寄りの雰囲気を作りだしてしまうので、講義内容自体はサブカルチャー研究ではやや使いづらい。むしろ授業以外の落書きなどにそのような嗜好・傾向が見えるものである。

（図版1）学生制作：タイトル『実験中の魔女』、人物像などには、近代日本漫画、アニメなどに観られる形式化表現との類似があり、特徴的な目が赤いことも同様である。制作者は女子学生である。知恵・知識を暗示する背景の書物、世界を理解しようとする、探訪する内省的態度、魔女＝魔術師は「老賢人・隠遁の賢者」などを象徴・暗示・イメージする内容である。



3.2. 「空想ファンタジー絵画を描く」まとめと考察

今日の新しい「存在論」からすれば、我々が想起したものでさえ空想ファンタジー・幻想、我々が想起したものでさえ現実にはそれらは存在するといえる。それらは人間の行動や社会に影響を持ち、現実には何かを変えていく。

図版1

すべての情報を個人の頭に入れることは不可能であっても、おおよそ我々にとってどのような見方をしたときにでも在るもの、それが内面的なものであっても、どんな小さなものであれそれは存在しているといえる。「人間の実存」にもこの存在とが重なり合わさっていく。

学生たちの生活様式で、一部に強く見られる内向的な閉鎖的な自分の世界を持つ者がいる事。これらは「適応規制」や現実逃避と言ってしまうと否定的な印象を持つが、無意識からの要求での休息や「癒し」（よく見かける単語だが肉体が疲れているときにもよく使われる。）と心のバランスを取るための自然な行為と思えば肯定的な印象を持つものになる。不完全な適応規制は欲求をむしろ増幅し、負のスパイラルに落ち込み閉塞的な状況になり易い。空想的・幻想的でありながら高い欲求へと昇華した絵画制作すなわち表現活動は解決手段になりえると考えている。

3.3. 実践授業②「視覚以外の絵」

「視覚以外の絵」という主題の授業実践を紹介する。まず「箱の中身はなんだろう？」という課題を行う。これは段ボールの中に入れたものを見ることなく中味を触ってそのイメージ、感じたもの、ひらめいたものを画面に自由に構成する。手を伝わる触覚を中心に作画せよというものである。子どもの遊びでは、中身当てクイズなどに類似したものがある。ここでは対象者は中身が何であるのかを記憶から想像しながら、その固有名称、名付けられたものを想起し、その形態そのものを普通に忠実に描く場合が多くなる。

ごく普通の認識では、通常の絵画は視覚中心の世界観であるが、人間存在は様々な感覚器官から得られた情報を総合しながら世界を認識し、世界観を構築する。そこで本来は映像化しにくいと思われる、触覚・嗅覚・聴覚・味覚について関心を向けてみる試みである。導入部では自分の体験や記憶の中からそれにまつわる事象を幅広く解釈しても良いという説明をする。もし造形表現やデザインの経験があればやや形式的・ステレオタイプ的なのであるが一般的にも用いられる概念を線的な表現を取って例に挙げれば、ギザギザ線とは、激しい・ザラザラなど、緩やかな曲線は柔らかい・やさしい・あまい等のイメージである。色でいえば、赤は、熱い・激しい・辛い（唐辛子の食感イメージが支配しているのか）等、青は、寒い・穏やか等のイメージである。同様の課題を専門教育を受けている学生などに行った場合には、このような社会通念上一般化された造形表現の形式を使って作画できる。説明的になりすぎると萎縮してしまい表現しにくいので、後で解説文を添えることも指示すると、こちらの想像以上に自由な広がりのある線・形態・色彩を画面に描いている。

「少しでも自分の感受性に注意を払う人ならば、薔薇の「赤」の感じ、冷たい水がのどを通るときの、「ごくっ」と「さわやかな」感じ、洗いたての猫の毛に触れた時の「ふわふわし」た感じは、決して言葉では表現しきれないある種の原始的感覚を持っていることに同意するだろう。質感を言葉、より一般的に言えば「シンボル」で表現しきれないことは、質感に関する最も基本的事実だ。私たちにとって、世界は、この様なシンボルでは表現しきれない、「質感」に満ち溢れているのだ。」⁷

学生たちは、「甘いお菓子を食べたーおいしいー何かしあわせでフワッとする」、この様な事象を感心するほどに無理なく自然に描こうとしている。脳内における一連の体験を描くときには、クオリア（感覚質）と呼ばれる問題があり、このクオリア（感覚質）は主観的な意識体験とも呼ばれているが、科学

界、脳科学認知科学等の心に関わる科学では「ハードプロブレム」(むづかしい問題)とも言われ、いまだ未開の分野でもあるので私如きでは深く言及できない。

(図版2) 学生制作: テーマ『洗剤』、「せんたくもののやわらかいにおいをイメージしました。水や花など、やさしい感じです。色をカラフルにすることで、いろんなにおいが表現できるようにしました。」(本人解説文より引用)



図版 2



図版 3

(図版3) 学生制作: テーマ『初めて新しい辛い物を食べた時の口の中の衝撃』、「私の中で辛いもののイメージが赤や黄色、黒、緑だったのでこの色を使いました。はねるような強い感覚を表現したかったので模様を躍動感があるようにイメージして描いてみました」(本人解説文より引用)

(図版4) 学生制作: テーマ『春』、「ピンクで春の暖かさ、青で春の夜や夕方頃の少し肌寒い空気を表現しています。そこに、春ならではの様々な種類の花のにおいと、春風などを表現したつもりです。渦巻き模様では、春ならではの期待や希望、楽しみや夢と緊張や不安、寂しさなどを表しています。」(本人解説文より引用)



図版 4

3.4. 「視覚以外の絵」まとめ・考察

芸術は感覚に質のある感覚体験をごく通常に対象として、ずっと以前から表現を行ってきた歴史がありその扱いには深い造詣がある。証明や説明の困難なことは先のハードプロブレムと同じ理由であるが、恐らくは思考や言語の限界を示している。いずれ何らかの手段で解明が進むであろうが、人間の実存と実在論には質のある感覚体験が関連付けられる。クオリア(感覚質)、感覚体験を持たないものは人と言えるのかという倫理、哲学的な問いかけや、クオリア(感覚質)、感覚体験は実在であるといえるのではないのかという問いかけをしてみると、このつながりが理解していただけたらと思う。感覚体験の生命感のある躍動が子どもにおいてもまた現代人にとっても重要であり、美術・造形教育の意義となる。

（図版5）作者：ワシリーカンディンスキー（ロシア、1866－1944）作品名：『すみれ色』、抽象絵画を創始した20世紀美術に重要な役割を果たした。総合芸術的なものを目指した。共感覚（複数の近くが複合し、クオリアを持つ）であるといわれることもあるが定かではない。音・音楽と平面絵画の融合など試みており、そこには様々な感覚体験がある。

3.5. 実践授業③「自由な自己表現とは何だろう？」

実践的授業の課題で『自由な自己表現ってナンダロウ？』というタイトルで行っているものがある。対象学生の年齢帯は20～21歳、性別としては女子学生が9割近く男子1割、保育士・幼稚園教諭への去就がほとんどを占める事を考えると教育的意識と



図版5

感心は高いと思われる。課題の時期は3年生に当たるのだが、高校卒業からすると2年以上経っており、バイトなども経験し社会との接点も増える。自由に振る舞える範囲が広がった大学生活にも慣れ、自主性や自立心などではそれ以前より発達していると思われる。ある意味では高校から大学に入学したての時期の方が青年期から成人期の移行における自己の確立や大きな精神的、心理的变化は要求されるのだが、ただし、日本の場合では就職して社会に出ていく時が一番大きな転換期かと思われる。ここの自己表現の意味は非常に広く解釈してよいという説明をしている。これを出題側としてはどう捉えるかも興味があった。自身を自己・自我（自我という用語を使うと、我が強く空気を読めない人というようなネガティブな印象を与えるのだが）それを象徴する事物、欲望や願望または出来事、思い出でも幅広く「何でもあり」でもよいと導入している。対象者にとって指導する、教える側としての子どもの気持ちを考えることを心がけることがあるかもしれないが、自身の問題となると意識が変わってくるだろう。他者に理解を求めないで独りよがりでも良いということも導入しているが、これは個人と組織・集団の一員としての二面性における社会性の顔が前面に出すぎないための意図がある。おまけで言えば良好な成績評価を受けることを狙いすぎることもあるのだが、実指導上ではこの点にも注意している。

制作から解ることについて。比較対象として美術の専門教育現場での指導経験からすると、芸術の表現を勉強しているこれらの生徒とは違って、表現手段や手法が行きわたっていない為だが、保育士養成校にもやや難しい内面表現を試みる者もいる。「ぐちゃぐちゃした気分」をテーマにした抽象的オブジェを作るなどは芸術表現として多くの芸術家が試みてきた内容に近似している。ただしこのような者は少数派であった。絵画の専門教育を受けているものとしてはこの様な作品はうれしいのだが、今回のテーマとして特徴的と思われたことは、自分の好きなものは自分を表わしているという主張が多いことである。好きな食べ物、お菓子、かわいい動物などかわいと感じるもの、友達との楽しい交流、他には趣味等が代表に挙げられる。楽しく嫌なことも忘れさせる時間や物等が本当の自分の姿なのかという問いかけができる。

適応規制の代償行為（満たされない欲求を別のものにすり替え満足しようとする機制）にも思えるのは、これに本人自身の作品解説文を付けさせるのだが、ここに、ほとんど何も説明されていない事であ

る。「好きなことをやりました～」だけなのだが裏を返せば、どこにそうさせる根本があるのかが分からないということでもある。

(図版6) 学生制作：タイトル『ごちゃごちゃのグルグル』、以下は本人による作品紹介文より。「これは、私の心の中で嫌だなと思っていることと、好きなこと、楽しいことが「ごちゃ混ぜ」になっているのを表現しました。青い糸が嫌なこと、ピンクの糸が好きなことです。箱に刺さっているのが自分自身であり、両方の糸で巻いてあります。箱から飛び出ている針金も自分で意地悪なところやダメージを受けていることを表しています。」



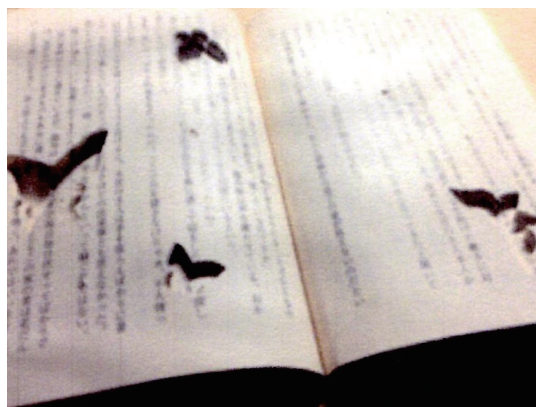
図版 6



図版 7

(図版7) 学生制作：タイトル『ファブリックボードアレンジver. 昨年の思い出の写真を飾る。』、他者(友人や親しい人々)との関係における思い出や記憶を基にした作品は他にも多く見られた。

(図版8) 学生制作：タイトル『本を読むこと』、以下は本人による作品紹介文より。「本を読むこととはイメージを増やす事だと思っています。なので今回はイメージを蝶にして飛ばしました。増えた蝶は1つの木になり自分の頭に蓄積されます。」



図版 8

3.6. 「自由な自己表現とは何だろう？」考察とまとめ

ここでは成果を共有するために展示会という方式で発表しみんなが鑑賞する。他者に表す伝えるという点で有

効である、たとえ個人の嗜好であっても。実際、他者、主に友人から得る承認欲求という面では、これは会場の教室は盛り上がりを見せて好評だった。実は他者から受け入れてもらいやすい姿として作品を作っているのかもしれない、だとすればそのコミュニケーション力の高さである。しかし褒めるばかりではなくそこには自我は集団の中に埋没しているようである。自我をさらけ出すことや欲望を開示することには強い抵抗を感じるが、自分を見つめ本来の自分を理解する行為は自由と解放につながる。

「自分が自分自身で思い込んでいる自分の価値というものを捨て去って、自分の真の姿をはっきりさせ、ますます自分自身になりきること、それがまた、じつはおのれの限界をはっきり超えて、よ

り高く、より大きく自分を生かし、前進させていくことなのです。自分自身の姿をありのままに直視するということは強さです。誰もが絵を描き、おのれをすなおに表現するということは、不必要な価値観を捨て、自分を正しくつかむ、きわめて直接的で純粋な手段であり、それによってまた、もっとも人間的な、精神の自由を獲得することができるのです。だから私は、でたらめでもいいから描きなさいと、やや乱暴な言い方だが、誠意をもってすすめるのです。」⁸

時には他者とのかかわりを遮断し個人として自我の意味を見つめる絵画制作はアンチながら価値を与える。社会とのかかわりとは関係なくとも存在し本能的生得的な肯定感を高める。絵画制作とは非常に個人的な行為ゆえに自己肯定感を高めることができるのではないだろうか。

4. 結論、実験・実践的芸術教育、美術・造形教育からの可能性

これらに挙げた実験授業では、素材・技法などは従来のものであり特別なものは使用していない。鉛筆と紙と筆と絵の具を手の動きによって線を描くといった最もシンプルかつクラシックな組み合わせで表現可能なものである。この種の表現は、長い試行錯誤の上で洗練され、ある意味、完成されてきている。小・中・高の教育場面だけのみならず、子どもの時から絵を描く事は誰しも経験があるものだ。よって指導と導入ではその制作上の概念・意識などを参考になる作品を提示することや言語で説明・解説しながら進行する。実際の指導上での注意点としては、存在とか実存とかのそれ自体に説明が必要になる概念は全く使っていない。あくまでも日常会話でもありがちな平易な会話である。もし少し違うとすれば、「何かを感じたことがあるか？」を問いかけるようなことがあるだろうか。それによって各自が判断し、自主的に創作してゆく。このような制作の発案や行為の中で絶え間なく思考や感覚の場でやり取りが行われ、創造的行為とこれ自体が自己との対話と認識が行われる。描こうとする対象の観察や洞察、自己の反映と深く掘り下げようとする行為、主体と客体が一体となるような合一感などは、特別な意識状態であるが、絵画の制作活動・表現活動にもたらせられるものである。

指導者として例えば「子どもが花の絵を描いた」という事象を見ただけでも、そこに絡むものは多様な要素や様々な次元と意味がある。なぜ、どうして、どのように、動機、意識、描かれたものの解釈・判断、背景にあるあらゆる意味、因果関係、そしてそれを捉えた客観、他者としての自分が在ることなど。経験則や生きた体験などに基いた力が必要とされ、これらには指導者も調和が取れた世界観を有していることが必要となる。

造形の世界では感覚及び感覚による体験を自明の存在として取り扱っている。それは実存と結びついている。芸術の世界では作品として成立し、素材が何でできているのか、何が描かれているのかなどの表層的要素を超えて、その本質的価値が認識されると、意味のある事物として実体化し、「實在」のように扱われる。

「人間の実存」と「實在論」が、初めて絵を描こうとするものにとって、恐らくは始まりはとても素朴なものである。見えるものが、触れることができるものがこの世界のすべてであるとか、はっきり感じとれる意識や感情からが、その入口となる。ただその世界のそれがすべてではないということに気づいていくこと、美術・造形の時間と授業という場を通じて、他では持ちえない時には日常とは違う特異

な空間での経験が重要で、描き創造するという体験による直接的・直感的な気付きと、日常の生活や社会の強制とは違った意識とその変容に意味があり、ここからそれまでの意識を俯瞰することや自己の内省あるいは新たな自由な広がりを見つけ出すことができるはずである。

芸術表現の高度な意識活動としての長い歴史の蓄積には、人間の本質、自然あるいは社会との戦いあるいは融和、観察の中で生まれた多様な視点、価値の転換等は、現代でも光が当てられるべきものが見つけ出せる。偉大と呼ばれ、認知されて市民権を得ている芸術家でも、もしこれが現代の生活者であったのならば決して「いいひと」では無かったりする。独善的であったり空気を読まない人であったり変人扱いであったりと。しかし人間の可能性から見れば存在意義が大きい。生き方や自我の在り方など、または様々な領域での固定概念を外し崩してゆく視点などに、何かしらの進歩や発展をもたらすものがあるだろう。

「この点では、人間が他のすべての動物類にまさる点としてのとして断然圧倒的に多く具えている精神的感受性なるものが、人間と同等あるいは同等以上に動物に具わる他の二つの生理学的根本能力に比して、優位にあることは、これまた何びとたりとも否認しないであろう。精神的感受性が圧倒的に多ければ、認識することを本質とする享楽、すなわちいわゆる精神的享楽ができるようになり、しかも精神的感受性が断然圧倒的に多ければ多いほどそれだけ大きな精神的享楽が得られる。」⁹

美術・造形教育のような感性教育が目標にするもの、感性を豊かにするということには、肉体的、生理的、心理的な反応に対してだけではなく、そこから精神的な感受性にも繋がるものである。

「一般にインスピレーション〈霊気を吹きこまれる〉と呼ばれているものは、文字通りに受けとらるべきである。本当に、存在のインスピレーション吸気とかエキスピレーション呼気というものが、つまり存在そのものにおけるレスピレーション呼吸があるのだ。もはや何が見、何が見られているのか、何が描き、何が描かれているのかわからなくなるほど見分けにくい能動と受動とが存在のうちにはあるのである。母の胎内にあって潜在的に見えるに過ぎなかったものが、われわれにとってと同時にそれ自身にとっても見えるものとなる瞬間、一人の人間が誕生したと言われるが、〔その意味では〕画家の視覚は絶えざる誕生なのだ。」¹⁰

絵画や芸術などの概念的存在あるいは実体と思い込んでいるものに対しても、その観る視点によっていくらでも姿を変えられるものである。観ようとするそこにはその視点という存在があり、それが新たな固定観念をつくり、客観的とはあり得るのかということになり、そこからまた新たな視点をもたらそうとする。そのような無限に繰り返す罠に陥っているということは本論でも否定はできない。

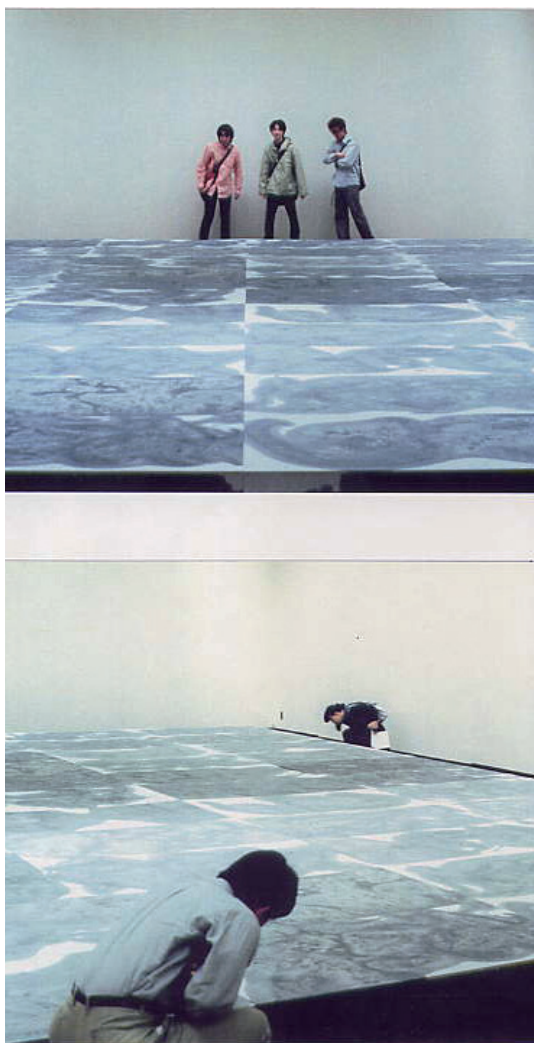
私の立場は、人間という存在をおおよそあるものすべてを含んだ総体とみなす。そのあらゆる環境など外部世界と思われるものも含み、世界観から人生観、自己の内観までが人という総体である。現代の抱える人間的実存・実在論の危機、不安定さは、内部環境・内的要因と外部環境・外的要因の双方向から反響、干渉しあって難しい事態になる。芸術性から人間を総体として捉える美術・造形教育のアプローチ次第では、これらを正しく把握し、そして調整するヒントがあると考えている。創造的行為からもたらされるのは生の意味であり、その抑圧からの解放や認識の領域を広げる効果には、漂泊する自我の危機や不安定さを乗り越えたり、確かな存在としての確立された自我の目覚めを促すこと、自己充足

感や自己同一性あるいは高次元の欲求への昇華等への可能性があるだろう。

（図版9）「沈黙の海」1999年著者制作、写真の会場は福岡市美術館

制作のコンセプト（概念）が重要であると考え。世界観を無理に言語で表すと、流動的や混沌、未分化、始原等である。具体的な固有名称を持つ要素は一切ない。創造的行為における実体のあるものの物質的な次元から、意識的で意味性のある次元への飛び越えである。制作者にとって実在や実存についての様々なやり取り、それが葛藤や諦観、無秩序な混濁であっても現れるものだと考える。自身の活動の経験から得られる、様々な要素が教育現場へフィードバックされることになる。

「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」などの哲学的問題の論争などの答えの出ない問いかけは、芸術家にとっては創造の力ともなる。答えが出なくとも挑戦することができる分野である。他者に納得させるための論理的証明の必要がなくとも、作品の魅力を押し上げる要素ともなる。優れた芸術家たちはどうも先を走りすぎる傾向があるらしく、実証や証明を要求されないことでも挑む勇氣や自由さがある。造形教育も本質的に明らかになっていない検証できないものを多数含むが、それらもありのままに継承されて様々な教育の場と幼児教育の場にもあるということは、社会がその大切さや有用性をどこかで認知していることの表れだろう。



図版 9

5. あとがき、おわりに

広い視点からの可能性についていえば、人間・自我・社会を含む世界像を捉える新しい「実在」は現代を生きる若者にとっても意味があり、美術教育にはその気付きのための手法を導入することもできる。美術・造形教育の手法とその基礎概念は時代とともに刷新し、適応したものでなくてはならないと考えている。また今回は人間の「身体性」という側面についてはその視点で多くを語らなかったが、これをとても重要なものと考えている。

現実的な生活場面での教育は、ただその目先の目的が、社会への帰順や順応のみに陥りがちだが、ここでは人間存在としての本質的議論に立ち入るための哲学的な問題提起である。これは教育としての有効性や現代若者学生への意義を考えると、つまるところごく単純な目的であり、それは幸福や自己実現に導き向う道筋である。これが実直な私自身の基本理念あるいは自分自身の願望なのかと思うところがある。

現代社会の思想・科学の今後の流れからすれば、クオリアなどの新語を含むハードプロブレム（難しい問題）への挑戦は新しい分野であり、新時代の哲学的な実存や存在に関する視点は変化し続けて新たな理論も出てくるであろうし、大きなパラダイム転換もあるかもしれない。様々な新発見と実社会の変化とともに、こちらも様々な認識を改めてゆかなければならない。もしかすると数年後にはもう自分自身で今日提示したことも否定しているかもしれない。

若者世代の意識の変化は、悲観的なものではなくむしろ新時代の到来として必要な転換と考えられる。実社会での旧態依然な価値や制度や規範等、縛られたものからの脱却とそこからの望ましい転換であり、眼に見え辛い意識や精神レベルでの変革ほど文化あるいは文明にとって重要になるものはないだろう。進化や退化、繁栄か衰退などという価値の視点だけでは計り知れないようなものであるようだ。

【脚注】

- 1) V. E. フランクル (1957)『死と愛』下山徳爾訳みすず書房 p.33
- 2) マルクス・ガブリエル (2018)『なぜ世界が存在しないのか』清水一浩訳、講談社 p.76
- 3) マルクス・ガブリエル (2018)『なぜ世界が存在しないのか』清水一浩訳、講談社 p. 273
- 4) マルクス・ガブリエル (2018)『なぜ世界が存在しないのか』清水一浩訳、講談社 p.76
- 5) ジークムント・フロイト (2007)『幻想の未来』中村元訳、光文社 p.13
- 6) フランク・ゴープル (1972)『マズローの心理学』監訳者小口忠彦、産業能率大学出版部p.67
- 7) 茂木健一郎 (1997)『脳とクオリアなぜ脳が生まれるのか』日経サイエンス社 pp. 11-12
- 8) 岡本太郎 (1999)『今日の芸術』光文社 p.165
- 9) アルトゥル・ショーペンハウアー (1958)『幸福について』橋本文夫訳、新潮社 p.4
- 10) モーリス・メルロポンティ (1966)『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳みすず書房 p.266

【参考文献】

- 1) カール・グスタフ・ユング (1999)『元型論』林道義訳、紀伊國屋書店
- 2) ハーバート・リード (2001)『芸術による教育』宮協理、岩崎清、直江俊雄訳、フィルムアート社
- 3) 文部省 (1993)『美術科における学習指導と評価の工夫』日本文教出版株式会社
- 4) 園田正治 (1976)『子どもの絵と脳のはたらき』黎明書房
- 5) ベティ・エドワード (1981)『脳の右側で描け』北村孝一訳、マール社
- 6) セーレン・キェルケゴール (1957)『死に至る病』斎藤信治訳、岩波文庫